

① 名古屋市における昆虫類の概況

名古屋市の市域は、木曾・長良・揖斐の木曾三川により形成された、濃尾平野の中央部やや東寄りに位置し、沖積平野と丘陵地からなるが、最高点は守山区東谷山（とうごくさん）の標高 198.3m に過ぎない。本来なら照葉樹林が発達する地域であるが、長い間の人の営為により生態系は攪乱され、極相に近い植生は東谷山の一部に残っているに過ぎない。市の東部には、1960 年頃まで田畑と二次林からなる里山的な景観が広がっていたが、市街化の波に押され、今日そのような景観は、守山区や名東区・天白区の一部に残るのみとなっている。市の西南部は海拔ゼロメートル地帯で、広く水田と畑が残っていたが、現在ではここも都市化が進んでいる。

生態系がどちらかといえば貧相に見える市域であるが、よく調べてみると、注目すべき昆虫が、狭い範囲に現在も幾つも命脈を保っていることが分かる。開発の波にさらされ、よりシビアな条件で生きているだけに、生息地の保全など、生態的価値の大きさによってはただちに対処すべき事例が出てくる。子どもたちにとって身近な学習のフィールドとして、保全したい自然的確に把握しその重要性を指摘するためには、残された自然の継続的な調査とその公表が必要である。レッドリストにも県レベルよりも地域に密着した、より逼迫した意味合いが生じてくる。

現在、昆虫相の観点から名古屋市内で特に注目すべき自然として、守山区上志段味の東谷山一帯、千種区平和公園南部と東山公園・守山区小幡緑地・名東区猪高緑地などの緑地公園、東部丘陵地などに散在する塚ノ杵池や大根池・猫ヶ洞池などのため池、熱田神宮などの寺社の鎮守の森、名古屋城周辺、そして庄内川の河川敷と河口のヨシ原などをあげることができる。この中で東谷山については、2010 年 4 月に、愛知県の自然環境保全地域に指定され、野生動植物保護地区を定めて湿地や照葉樹林などが保護されている。

名古屋市のレッドデータブックは 2004 年に初版が刊行され、2010 年に内容を補完した補遺版が刊行された。その際には、ため池と周辺環境の調査や、庄内川河口ヨシ原の調査結果が加味されたが、前回改定の 2015 年版では、熱田神宮社叢の調査と、東谷山の自然環境保全地域の調査結果を加味することができた。熱田神宮調査におけるオオゴキブリの現認、東谷山におけるオオシモフリズメやアヤコバナネナミシヤクの名古屋市初記録などの成果があり、東谷山では愛知県未記録のコウチュウやガも発見されている。東谷山のシイ・カシ類の多い極相林は更に調査を継続する予定である。

名古屋市の地史については、2004 年版に概略が述べられているが、特に古東海湖に由来するシラタマホシクサやシデコブシなどの「東海丘陵要素」をはぐくむ、湧水に涵養された貧栄養の小湿地には、現在でも見るべき生物が多い。しかし市内に散在するこれらの小湿地は、植生の遷移が進み、ササの進入も著しく乾燥化の一途をたどっている。水脈の確保やササ刈り・上木切りなど、保全のための人為が与えられなければ、小湿地は早晩消滅の運命にあるであろう。

名古屋市では、このような湿地と周辺の環境に依存しているハッチョウトンボ、ニホンアカジマウンカ、ハウチワウンカ、ウラナミジャノメ、ウラギンスジヒョウモンなどの生存はまさに風前の灯といえる。これら湿地に生息する種の多くが、環境省の絶滅危惧種に選定されている種である。

かつて市内に生息していたヒメヒカゲやコバネアオイトトンボは既に絶滅し、ヒメタイコウチも確実な生息地が減少している。また市内の湿地の昆虫の調査はすべての目（もく）について十分とはいえず、重要な種が人知れず消えていくこともありうる。そういった意味で、1996 年 6 月に名古屋市のピオトープ公園第 1 号としてスタートした天白区島田湿地や、それに続く守山区八竜湿地のようにフェンスで囲い、時期を決めて一般公開するような徹底した保全は、重要な行政施策といえる。

湿地とその周辺には、ハンノキ林を伴うことが多い。ハンノキ林にも特有の昆虫が生息するが、特に 2012 年の環境省のレッドリスト改訂で、新たにガ類のオナガミズアオとウスミミモンキリガが準絶滅危惧に選定された。里山のハンノキ林のある環境が全国的に減少しているからであろう。両種とも狭食性で、名古屋市内でもハンノキ林のある環境に限って見られる。緑地のため池周辺に多いハンノキ林は、公園整備などで不注意に伐採しないように、特に注意が必要である。

ため池の昆虫については、2009 年に名古屋城のお堀を含む、市内 10 ヶ所のため池について、名古屋市環

境局と市民団体の協働で、名古屋昆虫同好会の支援を受け市民調査員を募り、年3回の調査が行われ、それぞれのため池の概況が明らかになった、ベニイトトンボの分布拡大や、エサキアメンボの名古屋市初記録などの成果が得られたが、タガメや大型ゲンゴロウ類の絶滅、タイコウチなど大型の水生カメムシの減少などマイナスデータも得られている。

地域別にみると、守山区東谷山ではウラクロシジミ、クロヒカゲ、ウスグロクチバ、トウカイツマキリアツバなどが、現在市内でこの周辺だけに生息していて、コウチュウやカメムシにも他では見られない種がいる。近年山麓の湿地の細流で自然状態のゲンジボタルが確認された。ギフチョウやミヤマセセリは名古屋市では絶滅寸前であり、東谷山ではたとえ姿を見たとしても、瀬戸市側からの移動個体の可能性がある。ミヤマセセリは猪高緑地でもわずかに現認できる。

千種区平和公園南部と東山公園周辺は、市の中心部に近いが自然の残された緑地であり、2006年より「なごや環境大学」の事業の一環として始まった、名古屋の棲息生物調査実行委員会による児童や市民対象の夜間採集体験で、集光性昆虫のデータが得られ公表されている。ガ類では全国的な希少種マダラウスズミケンモンや湿地性で環境省の絶滅危惧に選定されているガマヨトウなどの重要な記録が出ている。守山区小幡緑地・名東区猪高緑地などの緑地も、それぞれ市民団体による保全・調査活動がなされ興味深い種の現況が得られる。アベマキやコナラ主体の雑木林にはコシロシタバが局所的に多く、近年フシキキシタバも見られる。名東区猪高緑地にある塚ノ杵池ではベニイトトンボが産し、ハイイロボクトウやクロフキオオメイガなどの湿地性種が多い。

熱田神宮社叢には、オオゴキブリなど極相に近い古い森に生息する種が残っている。名古屋城周辺では堀の石墨にウマノスズクサが多く、市内での発生が不安定なジャコウアゲハの安定した供給地となっている。以前と変わらずエノキやサクラの古木にヤマトタマムシがかなり発生し、ヒラタクワガタやコカブトムシも比較的近年の記録がある。堀の一部ではアサヒナカワトンボが、市中心部であるが遺存的に発生している。また堀の一部にヒメボタルが毎年発生をしているのは周知の通りである。

庄内川河口のヨシ原では、絶滅したと思われるヒヌマイトトンボは再確認されていないが、ガ類ではハイイロボクトウ、ヌマバウスキヨトウなどの、環境省のレッドリストに選定されている種が生息する。河口付近には汽水域に産し、幼虫は水中生活しフジマツモ科やコノハノリ科の藻を食べることが知られるエンスイミズメイガが多産する。

以上はこの地域の在来の昆虫相の中での注目種であるが、近年の温暖化現象による南方系の種の北上・東進や、海外から移入された帰化種の多発により、新たな競争が生じて今日的な昆虫相が形成されつつある。

名古屋市の位置は、以前は年平均気温14℃ラインにあるとされ、1950年代までは大体その位の平均気温であったが、名古屋気象台測定の平成元年から平成10年までの10年間の年平均気温の平均値では、年15.9℃であり、平均気温が1950年代以前より2℃近く上昇している。今世紀に入るより少し前から、南方系の昆虫の北上が目立ち始め、以前は関西以西に分布し名古屋市ではほとんど見られなかったツマグロヒョウモン、クロコノマチョウ、ナガサキアゲハ、ハマオモトヨトウ、ニジオビベニアツバ、タイワンクツワムシなどが市内で定着している。市街地でクマゼミが増加していることも、表土の乾燥化とともに温暖化が競合関係に影響している可能性がある。

帰化した外来種では、戦後早く帰化したアオマツムシなどはどこでも見られ、初秋には街路樹の樹上でリーリーと甲高い声で鳴いている。緑地の樹上でよく見かけるヨコヅナサシガメも近年よく見かける。外来昆虫の中には天敵が少なく大発生して人間に様々な害を及ぼすものもある。

日本生態学会が外来の動植物の中から「日本の侵略的外来種ワースト100」を定めているが、昆虫類は22種を占める。その中で名古屋市に発生が認められる主な種には次のようなものがある。

チャバネゴキブリ、オンシツコナジラミ、ヤノネカイガラムシ、マメハモグリバエ、イエシロアリ、イネミズゾウムシ、アルファルファタコゾウムシ、ヒロヘリアオイラガ、アメリカシロヒトリ

これらの中には在来種と競合し影響をあたえるものもいるであろう。また、天敵の多寡は、昆虫の発生に直接的な影響をもっている。近年、名古屋市内のオオミノガのミノムシが少なくなっている。これは1990

年代に中国より侵入した天敵オオミノガヤドリバエに寄生されたためである。

また近年、名古屋市東部に残る雑木林にコナラなどの成木のナラ枯れ現象が多発した結果、愛知県でほとんど採集例のない、ルイスホソカタムシやタイショウオオキノコなどが発生した。しかし現在は、ナラ枯れの終息に伴い、発生は減ってきている。また、2019年には、バラ科樹木に多大な影響を及ぼすと全国で問題になっている、クビアカツヤカミキリが名古屋市内でも見つかるとともに、被害地域ではサクラが枯死するという影響が出ている。広がりによっては市東部のウメ林やモモ林にも被害が広がると危惧されている。

チョウ目では、人為的な放蝶による発生と思われるものに、2003年に守山区庄内川堤防で発見された、韓国産と思われるホソオチョウが定着している。また、故意ではない外来種には、2012年に名東区牧野ヶ池緑地で発見され、猪高緑地でも記録されたホシミスジと、2013年に西区の新川堤防で発見されたムシヤクシロツバメシジミがある。ホシミスジは、おそらく食樹のユキヤナギやコデマリ等に付いて日進市に2010年以前に移入された個体群が、隣接する名東区に広がったと考えられる。

このようにある地域の昆虫相は、恒久的なものではなく、様々な要因によりダイナミックに変化しているため、各分野での継続的な調査が必須である。

② 名古屋市における絶滅危惧種の概況

名古屋市で過去に記録された昆虫類は令和2年(2020年)現在、3,751種である。その中から今回の改訂で絶滅21種(+3)、絶滅危惧ⅠA類26種(+10)、絶滅危惧ⅠB類21種(-4)、絶滅危惧Ⅱ類21種(-4)、準絶滅危惧60種(+8)、情報不足19種(-2)を評価した。評価した種類数の合計は168種(+11)で、名古屋市産の昆虫の約3.5%であった。種類数のあとの括弧内の数字は「レッドデータブックなごや2015」からの増減である。またランクの上下したものもある。

今回の名古屋市レッドリストの改訂では、身近な里山やため池などに生息する種が評価され、全体で+11とレッドリスト掲載種がわずかに増加した。

レッドリスト掲載種の選定には統一した観点が必要である。今回の選定に当たっては、専門研究者や同好者の意見をまとめ、名古屋市の現在の自然の実態を正確に表すように努めた。また、名古屋市のレッドリスト改訂のために5名の専門家調査員により2年間、焦点を絞った多くの現地調査が行われ、絶滅種は確実に絶滅と判定され、また「レッドデータブックなごや2015」で絶滅危惧とされたものの幾つかは、新たに産地が発見されたり、採集条件によっては少なくないなどの新発見が出たりして、ランクを下げた。

名古屋市には、市内で最初に発見され、名古屋市が模式産地となり、市の標本が完模式標本(ホロタイプ)となっている昆虫が次の9種ある。

キイロヤマトンボ、ナゴヤサナエ、ニホンアカジマウンカ、ヒメシジミガムシ、シワムネマルドロムシ、オオサワタマキノコ、ヒメアサギナガタムシ、ヤマトヒメメダカカッコウムシ、ヒメカバナミシヤク

このうち、オオサワタマキノコ、ヒメアサギナガタムシ、ヒメカバナミシヤク以外の種は、幾つかの県でレッドリストに挙げられていて、水域の環境をよく表す種で、市内でも減少している種なので名古屋市のレッドリストにあげている。

研究が不十分な目(もく)や調査が不十分な目は、今回は除外した。またクツワムシ、タイコウチ、オオクワガタ、ガムシのような一般に良く知られた種や身近に生息している種、市民が関心を持っている種で、減少が明らかな種はなるべくとりあげた。

過去に記録があっても、実際に市域に発生したかどうか疑わしい種は除外した。例えば戦前にオオムラサキの記録があるが、市外からの飛来種の可能性があり、掲載しなかった。

名古屋市の絶滅危惧種を概観すると、多くがため池や湿地などの水域に関係するものであることが分かる。また草地環境に生息するものも比較的多く、堤防や原野などの草地環境の消滅がシルビアシジミを絶滅させ、草原性のチョウ目やバタ目・コウチュウ目を減少させている。1960年代に市東部で大発生したドクガ駆除の為に東部丘陵に農薬の空中散布がなされたが、その後のマツ枯れ対策の農薬散布とともにやむを得ない措置とはいえ、大きな影響を受けた昆虫は多いであろう。

市内での保全への対策や留意点は、焦点が定まりつつあるように思われる。

③ レッドリスト掲載種の解説

【掲載種の解説（昆虫類）に関する凡例】

【分類群名等】

対象種の本調査における分類群名、分類上の位置を示す目名、科名を各頁左上に記述した。目及び科の範囲と種の配列は原則として「日本産野生生物目録—本邦産野生動植物の種の現状—（無脊椎動物編Ⅱ）」（環境庁編，1995）に準拠した。

公表されてから年数の経過もあり、その後の新しい取り扱いがある場合にはそれに準拠した。

【和名・学名】

対象種の和名及び学名を各頁上の枠内に記述した。和名及び学名は、原則として「日本産野生生物目録—本邦産野生動植物の種の現状—（無脊椎動物編Ⅱ）」（環境庁（編），1995）に準拠した。

公表されてから年数の経過もあり、その後の新しい取り扱いがある場合にはそれに準拠した。

【評価区分】

対象種の名古屋市における評価区分を各頁右上の枠内に記述した。参考として「レッドリストあいち2020」「レッドデータブックあいち2020」（愛知県，2020）の愛知県での評価区分、及び「環境省レッドリスト2019」（環境省，2019）の全国での評価区分も併記した。




【評価理由】

対象種を名古屋市版レッドデータブック掲載種として評価した理由について記述した。

【形態】

対象種の形態の概要を記述し、一部の種については写真を掲載した。

【分布の概要】

対象種の分布状況を記述した。また、本調査において対象種の生息が現地調査及び文献調査によって確認された地域について、各区ごとに着色して市内分布図として掲載した。ただし、絶滅と判断された区域はで示した。また、トンボ目に関しては、1999年以前の記録のある区域を 、2000～2015年の記録のある区域を 、2015年以降も記録のある区域を  で示した。

【生息地の環境／生態的特性】

対象種の生息環境及び生態的特性について記述した。

【現在の生息状況／減少の要因】

対象種の名古屋市における現在の生息状況、減少の要因等について記述した。

絶滅種については、【過去の生息状況／絶滅の要因】として、対象種の名古屋市における過去の生息状況、絶滅の主な要因について文献に基づき記述した。

【保全上の留意点】

対象種を保全する上で留意すべき主な事項を記述した。

【特記事項】

以上の項目で記述できなかった事項を記述した。

【引用文献】

記述中に引用した文献を、著者、発行年、表題、掲載頁または総頁数、雑誌名または発行機関とその所在地の順に掲載した。

【関連文献】

対象種の関連する文献のうち代表的なものを、著者、発行年、表題、掲載頁または総頁数、雑誌名または発行機関とその所在地の順に掲載した。

オオキトンボ *Sympetrum uniforme* (Selys)

評価区分

【評価理由】

もともと少なかった種であり、限られた産卵適地の衰退により、著しく減少した。市内での最終記録は1973年である

名古屋市2020	絶滅危
愛知県2020	絶滅危惧IA類
環境省2019	絶滅危惧IB類

【形態】

成虫体長は49mm内外。本邦最大のアカトンボ。体は斑紋がなく橙黄色一色で翅は前後翅共淡橙色を呈し美しい。

幼虫は背棘を第9節にも有することが特徴。

【分布の概要】

【市内の分布】

千種区、昭和田区、熱田区、守山区。

【県内の分布】

尾張、三河平野部に分布した。東三河山地の記録もある。

【国内の分布】

本州、四国、九州。

【世界の分布】

朝鮮半島、中国、ロシア。



オオキトンボ 雌
千種区東山、1950年7月9日、高崎保郎 採集

【生息地の環境／生態的特性】

開けた遠浅の大きな池で、池畔に草原を伴い、汀線内外に水生植物や丈の低い湿性植物が存在するような場所を好んで産卵する。

雄は汀線に沿ってパトロールし縄張りを形成する。移動分散性が強いと考えられる。

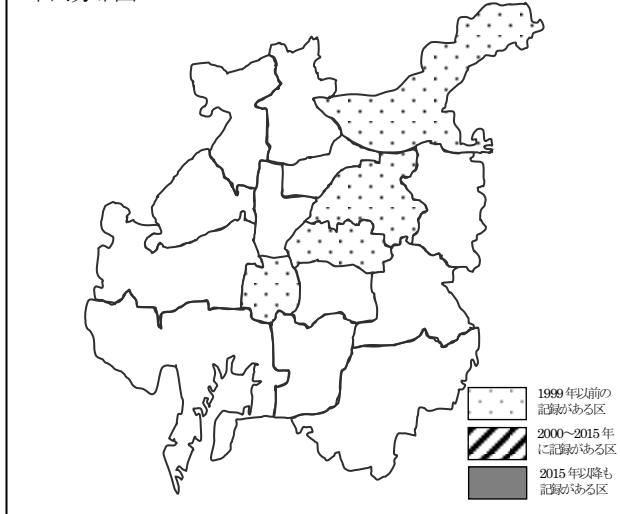
【現在の生息状況／減少の要因】

もともと生息地が限られ個体数も少なかった。県内での最後の安定的発生地は日進市の機織池であったが1988年を最後に没姿した。全国的にも産地は少ない。移動分散性が強いと考えられるので飛来の可能性がわずかにある。

【保全上の留意点】

産卵に適する環境を有する池沼の保全。現在は不在でも、生息可能な環境を有する池は飛来に備え現状を維持しておく必要がある。

市内分布図



【特記事項】

ショウジョウトンボの雌や未熟雄が本種と誤認されることがあるので注意を要する。

【関連文献】

安藤 尚, 2008. トンボ目. 新修名古屋市史資料編 自然, pp.350-361. 同 目録, pp.94-98. 名古屋市.
安藤 尚・山本悠紀夫・高崎保郎・相田正人, 1990. 愛知県のトンボ目. 愛知県の昆虫 (上), pp.9-78. 愛知県.
高崎保郎, 1987. 名古屋市名東区及び日進町のため池の注目すべきトンボ2種. ため池の自然, (5):3.

(成田茂生)

ギフチョウ *Luehdorfia japonica* Leech

評価区分

名古屋市2020	絶滅
愛知県2020	絶滅危惧II類
環境省2019	絶滅危惧II類

【評価理由】

名古屋市の都心部に近い産地は開発等により絶滅し、唯一残された産地である守山区東部の丘陵地も、生息に好適な明るい雑木林が減少し、食草のカンアオイ類とともに生息環境が悪化して、1970年代以降はほとんど確認されていない。東谷山に散発的に記録はあるが発生源は瀬戸市と考える。

【形態】

開張 56～62mm。雌はやや大きく前胸背に赤褐色毛がある。前・後翅とも黄と黒の目立つ縦縞模様がある。後翅尾状突起の基部に赤い斑紋がある。交尾した後の雌には腹部に交尾付属物がつく。

【分布の概要】

【市内の分布】

1950年代に千種区、昭和区、守山区で発生地が確認されていた。最近、1999年に守山区で再び記録されたが、ほとんど市内での記録はない。

【県内の分布】

尾張東部の丘陵地から三河山地にかけて分布していて、標高400m以下の山地に多い。

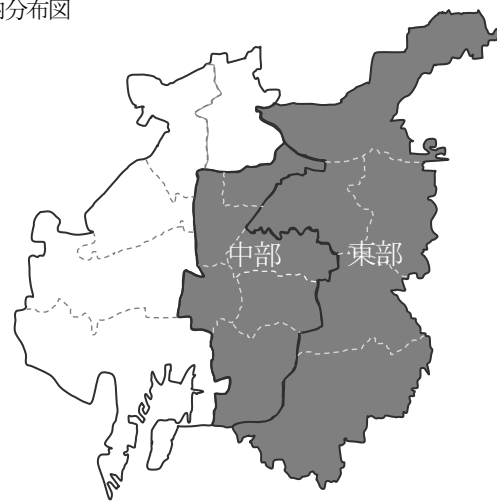
【国内の分布】

本州の特産種。北限は秋田県由利本庄市、西は山口県まで分布する。

【世界の分布】

日本固有種。

市内分布図



【生息地の環境／生態的特性】

明るい落葉広葉樹を主とした雑木林の林縁や林間の開けた場所でみられる。年1回、3月下旬から発生し、ソメイヨシノの開花期と本種の発生期がほぼ一致する。雄は山頂占有性がある。晴天時に活動し、名古屋市近郊ではショウジョウバカマ、スマレ類、ツツジ類、サクラ類の花で吸蜜する。幼虫の食草は、名古屋市周辺ではヒメカンアオイとスズカカンアオイであり、蛹で越冬する。

【現在の生息状況／減少の要因】

都心部に近い千種区と昭和区の丘陵地の個体群は絶滅したが、守山区と瀬戸市、尾張旭市との境界付近で1998年の記録がある。東谷山では瀬戸市側からの飛来も考えられる。

開発による雑木林の消失・孤立化が減少の主因であるが、雑木林の放置により遷移が進行し、照葉樹が繁茂した結果、林床の照度低下がカンアオイ類の生育に悪影響を及ぼしていること、都市周辺の緑地では剪定や下草刈りなどの過度な管理、害虫駆除目的の薬剤散布等も減少に拍車をかけていると思われる。なお、本種に関しては、チョウ愛好者による採集圧も無視できない。

【保全上の留意点】

里山的な、適度に管理された雑木林環境の維持継続が第一と考えられる。また衛生・樹木害虫駆除目的の薬剤散布を、必要以上にかつ広域に行わないことも大切である。

【引用文献】

- 高橋 昭・葛谷 健・阿江 茂ほか、1991. 愛知県のチョウ類. 愛知県の昆虫 (下), pp.21-95. 愛知県.
 石塚三郎, 1999. 名古屋市守山区におけるギフチョウの採集記録. 佳香蝶, 51(197):11-12.
 山田芳郎, 2008. チョウ目 (チョウ類). 新修名古屋市史資料編 自然, pp.464-475. 同 目録, pp.194-202. 名古屋市.
 愛知県, 2009. 愛知県の絶滅のおそれのある野生生物 レッドデータブックあいち2009 動物編. 愛知県環境部自然環境課.

【関連文献】

- 川副昭人・若林守男, 1976. 原色日本蝶類図鑑, pl.1,p.4. 保育社, 大阪.
 福田晴夫ほか, 1982. 原色日本蝶類生態図鑑 (I). 保育社, 大阪.
 白水 隆, 2006. 日本産蝶類標準図鑑. 学習研究社, 東京.

オオイトトンボ *Paracercion sieboldii*(Selys)

【評価理由】

かつては平地から丘陵の植生豊かな池に普通のイトトンボの一種であったが、減少が著しく近年市内での記録がない。

評価区分

名古屋市2020	絶滅危惧I A類
愛知県2020	絶滅危惧I B類
環境省2019	リスト外

【形態】

成虫の体長 33mm 内外、雄は水色と黒、雌は黄緑色に黒の色調。眼後斑が大きく洋なし型をしている点で同属3種と区別できる。

【分布の概要】

【市内の分布】

千種区、東区、中区、昭和区、守山区、緑区、名東区、天白区。

【県内の分布】

平野から丘陵地、山地にも分布する。

【国内の分布】

北海道、本州、四国、九州。

【世界の分布】

朝鮮半島。



オオイトトンボ 雄
愛知県長久手市阿畑、1985年5月28日、高崎保郎 撮影

【生息地の環境／生態的特性】

平地から山地にかけて植生豊かなで清明の水の池に生息する。

時に潜水産卵を行う。

【現在の生息状況／減少の要因】

市内にとどまらず愛知県全域での生息地の減少が著しい。安定的生息地は県内の丘陵、山地の一部に限られる。同属の4種の中では、生息水域の水質や環境の影響を最も受け易い。西日本広域に減少傾向が見られるが、その要因は明らかでない。

【保全上の留意点】

市内では残存の可能性は低いが、一般的には植生豊かな池沼の保全、ため池の人工的改変の阻止、ブラックバスなどの外来種の移入阻止が必要である。

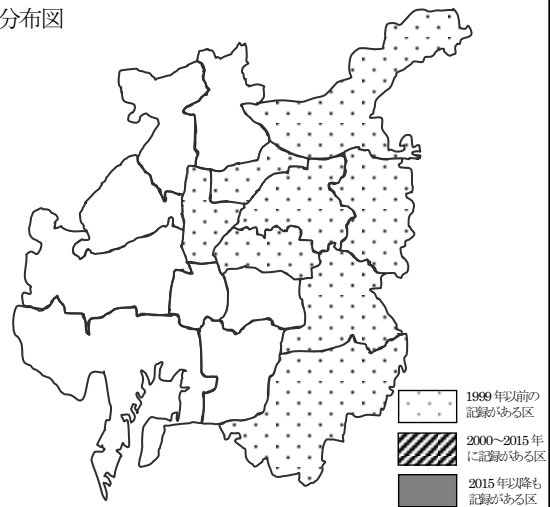
【特記事項】

同属のセスジイトトンボに最も似るので同定に注意を要する。

【関連文献】

安藤 尚・山本悠紀夫・高崎保郎・相田正人、1990. 愛知県のトンボ目. 愛知県の昆虫(上), pp.9-78. 愛知県.

市内分布図



キイロサナエ *Asiagomphus pryeri* (Selys)

評価区分

【評価理由】

かつては平地から丘陵地にかけての緩流に広く生息していた普通種であったが、近年生息地、個体数の減少が著しい。

名古屋市2020	絶滅危惧ⅠA類
愛知県2020	準絶滅危惧
環境省2019	準絶滅危惧

【形態】

成虫は体長 65mm 内外、やや大型のサナエトンボ。黒地に未熟時黄斑、成熟時は灰緑色斑を有する。近似種ヤマサナエに比べ胸部2本の黒条は細い。雌の産卵弁が下方に突出している。

幼虫の腹部後半はヤマサナエより細い。



キイロサナエ 雄成虫 千種区東山公園、1951年5月30日、
幼虫 守山区上志段味、2013年4月29日、

いずれも高崎保郎 採集

【分布の概要】

【市内の分布】

千種区、中区、昭和区、守山区。

【県内の分布】

尾張東部丘陵から三河丘陵、低山地にかけて分布。

【国内の分布】

新潟、関東以西の本州、四国、九州。

【世界の分布】

日本固有種。

【生息地の環境／生態的特性】

丘陵から平地の砂泥底の緩やかな河川に生息する。泥が多く植物質の薄く堆積している場所を好む。

雌は浅い砂泥に打泥産卵する。成虫の出現期は5～6月。

【現在の生息状況／減少の要因】

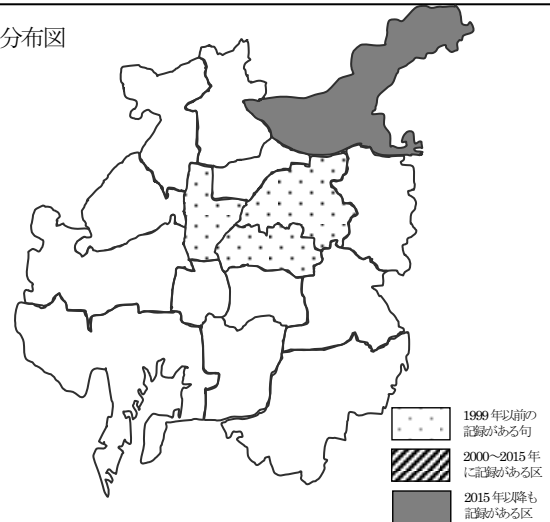
市内で生息するのは守山区の庄内川畔付近に限られる。県内でも稀になってきた。

河川開発で平地の中小緩流の衰失、周辺環境や水質の悪化が減少要因である。

【保全上の留意点】

市内では生息地が限られたが、一般的には平地、丘陵地の中小河川の水質や河川周辺環境の保全が必要である。

市内分布図



【関連文献】

安藤 尚・山本悠紀夫・高崎保郎・相田正人, 1990. 愛知県のトンボ目. 愛知県の昆虫 (上), pp.9-78. 愛知県.

(成田茂生)

エゾトンボ *Somatochlora viridiaenea* (Uhler)

【評価理由】

市内での記録は極く僅かしかない。生息に適する湿地も限られる。

評価区分

名古屋市2020	絶滅危惧ⅠA類
愛知県2020	絶滅危惧Ⅱ類
環境省2019	リスト外

【形態】

成虫は体長 60mm 内外、金属緑色の中型種、同属他種に似るが、尾部付属器、腹部黄斑で識別できる。



【分布の概要】

【市内の分布】

千種区、昭和区、守山区、天白区。

【県内の分布】

尾張東部の丘陵地から三河山地にかけて局所的に分布する。

【国内の分布】

北海道全域、本州、四国、九州の一部。

【世界の分布】

朝鮮半島、中国、ロシア。

【生息地の環境／生態的特性】

丘陵から山地の明るい湿地に生息する。雄は開けた湿地、林間の空地、水田上周辺の路上をゆっくり往復飛翔して縄張りをもつ。

成虫の出現期は6～9月。

【現在の生息状況／減少の要因】

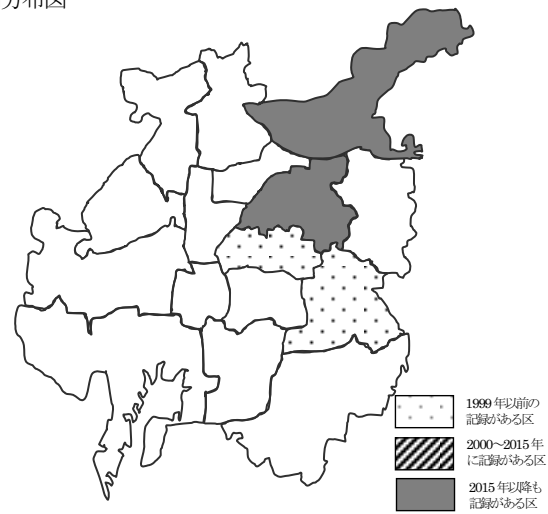
県全体でも現在確認されている産地は少ない。市内での記録も少なく、近年の記録は守山区大森八竜湿地（2010年）、千種区平和公園（2010年）で現在では生息したであろう湿地も小さくなり、乾燥化が進んでいる。

都市周辺の丘陵地開発による湿地の消失、近年の気象の温暖化による乾燥化が減少要因である。

【保全上の留意点】

湿地及び周辺の林も含めた保全が必要である。

市内分布図



【関連文献】

- 安藤 尚, 2008. トンボ目. 新修名古屋市史資料編 自然, pp.350-361. 同 目録, pp.94-98. 名古屋市.
安藤 尚・山本悠紀夫・高崎保郎・相田正人, 1990. 愛知県のトンボ目. 愛知県の昆虫 (上), pp.9-78. 愛知県.
安藤泰樹, 2011. 名古屋市千種区のエゾトンボの記録. 佳香蝶, 63(247):79.

(成田茂生)

ニホンカワトンボ *Mnais costalis* Selys

評価区分

【選定理由】

生息する河川の消滅、改修、水質の悪化などにより著しく衰退した。

名古屋市2020	絶滅危惧II類
愛知県2020	リスト外
環境省2019	リスト外

【形態】

成虫の体長 56mm 内外。雌雄別、地域別で翅色を異にする。東海地方では、雄は橙色翅で翅前縁に不透明斑を有し、雌は淡橙色翅である。

【分布の概要】

【市内の分布】

千種区、東区、中村区、西区、昭和区、瑞穂区、守山区、天白区。

【県内の分布】

平地から低山帯にかけて広く分布する。

【国内の分布】

北海道、本州、四国、九州に分布する。

【世界の分布】

ロシア（千島列島）。



ニホンカワトンボ
守山区上志段味東谷、2019年5月7日、高崎 保郎 撮影

【生息地の環境／生態的特性】

丘陵に近い平地から低山帯の比較的緩い流れの小、中河川に生息する。飛翔は緩慢である。

成虫の出現期は4月～6月である。

【現在の生息状況／減少の要因】

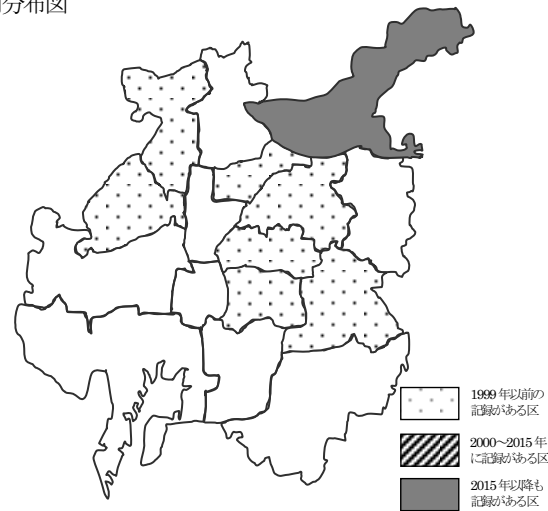
1940年代末頃までは、市中央部の山崎川などにも生息し、自然が残る天白区では1970年代まで見られたが、経済活動、市街化の進行に伴う市内小・中河川の改修、潰廃と水質の著しい悪化により絶滅し、現在では比較的河川の自然状態が保たれている守山区北端だけが僅かながら残存する。

守山区の庄内川河畔とその近傍では、幼虫の流下羽化によると推定される成虫を稀に見ることがある。

【保全上の留意点】

知られる生息場所は、守山区内の1箇所だけで、今のところ川の状態は良好であるが、その一側は今後開発される危険性も考えられる。市始め関係者の廃棄物投棄措置や工事に係わる留意が望まれる。

市内分布図



【特記事項】

本種の分類上の扱いが一応確立したのは近年のことで、以前は、オオカワトンボ、ヒガシカワトンボと呼ばれていたため注意が必要である。

【関連文献】

安藤 尚・山本悠紀夫・高崎保郎・相田正人、1990. 愛知県のトンボ目. 愛知県の昆虫(上), pp.9-78. 愛知県.
高崎保郎, 2019. 名古屋市守山区の *Mnais* 属カワトンボと才井戸流. なごや生物多様性6:pp77-81.

(高崎保郎)

ミヤマアカネ *Sympetrum pedemontanum elatum* (Selys)

評価区分

【選定理由】

元々市内では多くなかったが、近年報告を見ない。確実な最期の記録は2014年である。全国的にも減少が激しい。

名古屋市2020	絶滅危惧II類
愛知県2020	リスト外
環境省2019	リスト外

【形態】

成虫の体長35mm内外。前後翅に幅広の褐色斑を有する。成熟雄の緑紋や翅脈は紅色になりアカネ属の中では最も美しい。識別は容易である。

【分布の概要】

【市内の分布】

千種区、東区、守山区、緑区、天白区。

【県内の分布】

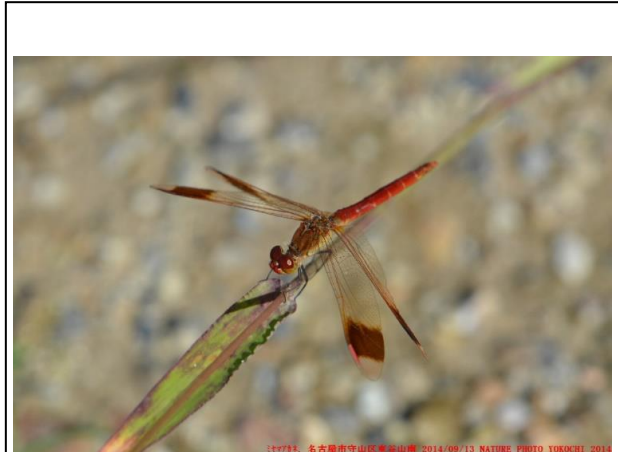
平地から低山帯にかけて分布する。

【国内の分布】

北海道、本州、四国、九州に分布する。

【世界の分布】

日本固有種。



ミヤマアカネ

守山区上志段味東谷愛知用水周辺、2014年9月7日、横地鋭典 撮

【生息地の環境／生態的特性】

幼虫が平地から山地にかけての小河川、水田の側溝、河川敷の水場など緩やかな清流に生息する。止水に生息する他のアカネ属に比べ特異である。羽化後の成虫は群れることがある。成虫の出現期は7月～10月である。

本種は水質に非常に敏感で、農薬などで汚染されると姿を消す。

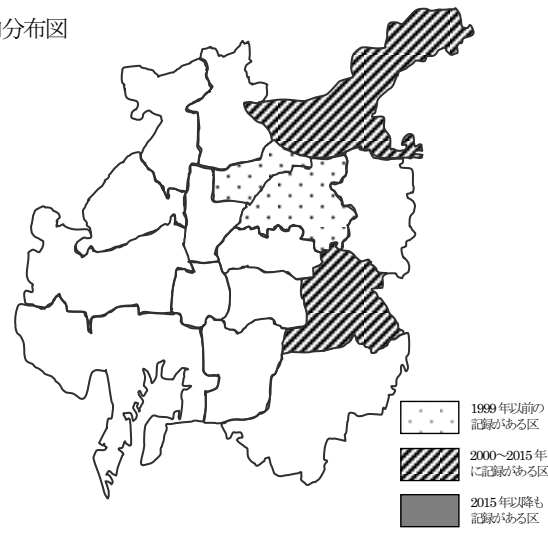
【現在の生息状況／減少の要因】

市内の記録は、1940年代後半頃が多く、1970年代までであるが記録された区は、東部丘陵地寄り少ない。最後の記録は2013年である。隣接する長久手市は絶滅し、みよし市で局地的に残存する。低山地から丘陵部の小流の早期の喪失が減少の主因である。本種は水質に非常に敏感で、農薬などで少しでも汚染されると姿を消す。

【保全上の留意点】

東部丘陵地の流水系は元来乏しい。具体的な保全策は考え難い。守山区北部の現自然状態を極力残すように努める。

市内分布図



【関連文献】

- 安藤 尚・山本悠紀夫・高崎保郎・相田正人, 1990. 愛知県のトンボ目. 愛知県の昆虫(上), pp.9-78. 愛知県.
 松沢孝晋, 2011. 名古屋市天白区平針の里山のトンボ相と里山の消失. 佳香蝶, 63(248):93-98.
 名古屋ため池生物多様性協議会, 2011. 平成22年度生物多様性保全推進支援事業 名古屋ため池生き物いきいき計画事業報告書, 名古屋ため池生物多様性協議会, pp.81. 名古屋.
 高崎保郎, 2014. レッドリスト種調査(2014)に伴う名古屋の蜻蛉分布知見若干. ため池の自然(55):7-13.

(高崎保郎)

オオアメンボ *Aquarius elongatus* (Uhler)

【評価理由】

平野部における確認例が少なく、生息地における確認個体数も少ない。

評価区分

名古屋市2020	絶滅危惧II類
愛知県2020	準絶滅危惧
環境省2019	リスト外

【形態】

体長 20~27mm で、本州産アメンボ類では、最大種である。通常、雄の方が雌よりも大型で、雄の大型個体では、中脚が顕著に長い。

【分布の概要】

【市内の分布】

千種区、北区、中村区、中区、熱田区、中川区、守山区、緑区、天白区。

【県内の分布】

新城市、豊田市、岡崎市、西尾市、瀬戸市、春日井市、日進市、犬山市など。

【国内の分布】

本州、四国、九州、対馬。

【世界の分布】

中国、韓国（済州島）、台湾。



オオアメンボ

緑区水広公園、2018年8月12日、澤田宗一郎 撮影

【生息地の環境／生態的特性】

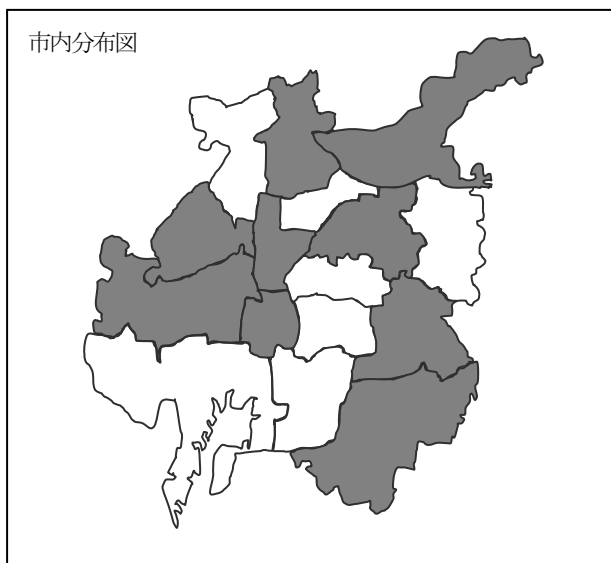
平地から山地にかけての樹林に囲まれた薄暗いため池に生息するが、谷筋の砂防堰堤の水たまりや河川上流部の緩流部などで見られることもある。

【現在の生息状況／減少の要因】

複数の新産地が確認されたが、局地的な分布であり、いずれも確認個体数は少ない。平野部での減少の大きな要因としては、ため池の改修や埋め立て、水質の悪化、生息地周囲の樹林の伐採が考えられる。

【保全上の留意点】

樹林に囲まれた薄暗いため池を好むため、現存するため池と池周辺の樹林の維持。採餌や繁殖に解放水面を必要とするため、スイレンやホテイアオイなど観賞用水草を軽々しく投入しないよう留意する必要がある。



【特記事項】

過去に千種区東山公園における生息が示唆されていたが（吉富・長谷川，1997）、名古屋市内を改めて調査したことにより同所を含む、複数の新産地が確認された（澤田，2019）。

【引用文献】

- 堀 義宏・横井寛昭，1991. 都市環境下の昆虫相について (2) 名古屋市の異翅目. 名古屋市衛生研究所報, (37):93-100.
澤田宗一郎，2019. 名古屋市内におけるオオアメンボ（カメムシ目アメンボ科）の記録について. なごやの生物多様性, 6:33-39.
吉富博之・長谷川道明，1997. 愛知県のアメンボ. 豊橋市博研報, (7):35-39.

(澤田宗一郎)

ナツアカネ *Sympetrum darwinianum* (Selys)

評価区分

名古屋市2020	準絶滅危惧
愛知県2020	リスト外
環境省2019	リスト外

【選定理由】

2000年以前は普通種であった。国内各地で減少し、本市も例外ではない。最普通種が著しく衰亡した例である。

【形態】

体長は37mm内外。中型のアカトンボ。成熟した雄は全身が真っ赤になり「アカトンボ」と呼ぶのにふさわしい種である。



ナツアカネ
千種区平和公園、2019年11月15日、

高橋幸希 採集

【分布の概要】

【市内の分布】

千種区、西区、中区、熱田区、昭和区、南区、守山区、名東区、天白区、緑区。

【県内の分布】

平野から丘陵、低山地に広く分布する。

【国内の分布】

北海道、本州、四国、九州。

【世界の分布】

中国、朝鮮半島。

【生息地の環境／生態的特性】

幼虫は平地から丘陵・低山帯の水田を中心に池沼、湿地に生息する。未成熟個体は移動分散性があり市街地のビルの屋上、鉄道の駅のホームの樹木など意外な場所でも散見される。産卵は、飛翔しながらの打空産卵で、アキアカネの打水、打泥産卵とは異なる。

成虫は7月～12月初旬まで見られる。

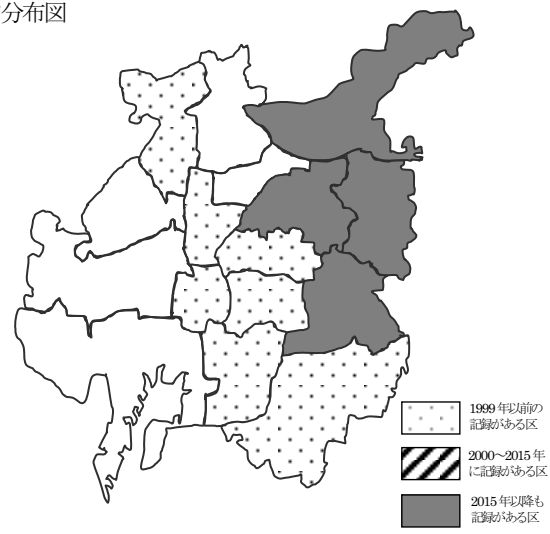
【現在の生息状況／減少の要因】

広域で極めて減少したアカトンボの代表的な種である。2000年以前市内では、秋になればどこでも見られた最普通種であった。それが減少著しく今では年に数えるほどしか見られない。全国的な水田の減少、水稻栽培法の変化、自然状態の劣化新規農薬の使用の相乗が減少の要因と考えられる。

【保全上の留意点】

市内及び周辺地域の水田、池沼への新規農薬の使用抑制。

市内分布図



【関連文献】

- 安藤 尚・山本悠紀夫・高崎保郎・相田正人, 1990. 愛知県のトンボ目. 愛知県の昆虫(上), pp.9-78. 愛知県.
 松沢孝晋, 2011. 名古屋市天白区平針のトンボ類と里山の消失. 佳香蝶, 63(208):93-98.
 高崎保郎, 2017. 名古屋市猪高緑地の蜻蛉と蝶. なごやの生物多様性, 4:89-126.

(高崎保郎)

マイコアカネ *Sympetrum kunckeli* (Selys)

評価区分

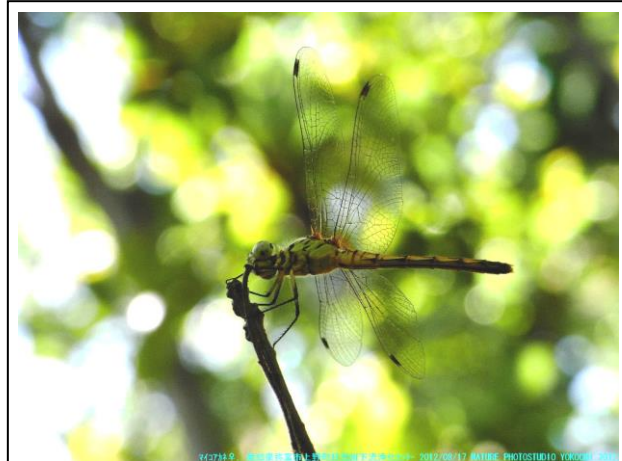
【選定理由】

2000年以降減少が顕著になり、ほとんど見られなくなった。

名古屋市2020	準絶滅危惧
愛知県2020	リスト外
環境省2019	リスト外

【形態】

体長は34mm内外。小型のアカトンボ。成熟した雄の顔面は青くなる。近似種のマユタテアカネ、ヒメアカネとは胸部の斑紋、雄の尾部付属器、雌の産卵弁で区別する。



マイコアカネ 雌
弥富市上野町日光川下流浄水センター、2018年8月17日、
横地鋭典 撮影

【分布の概要】

【市内の分布】

千種区、中村区、中区、熱田区、昭和区、南区、守山区、名東区、緑区で記録されている。

【県内の分布】

平野から丘陵に分布する。

【国内の分布】

北海道、本州、四国、九州。

【世界の分布】

朝鮮半島、中国、ロシア（極東）。

【生息地の環境／生態的特性】

幼虫は平地から丘陵の植生の豊かな池沼に生息する。生息環境の変化に敏感で、周囲の樹林の伐採で姿を消してしまうこともある。人間に対する警戒心も強い。

出現期は7月～10月。

【現在の生息状況／減少の要因】

1970年代までは多産した。1990年代までは比較的よく見られたが、2000年以降は急激に減少した。池沼の人工化、水質悪化に伴う水草の消失等確たる原因は明らかではないが、減少は各地で見られる。

【保全上の留意点】

池沼環境と周辺の二次林の保全。

【特記事項】

本種の、名称の由来は、雄の顔面が白地に青く美しく舞妓のうなじの白さと化粧の青白さに例えたもの。

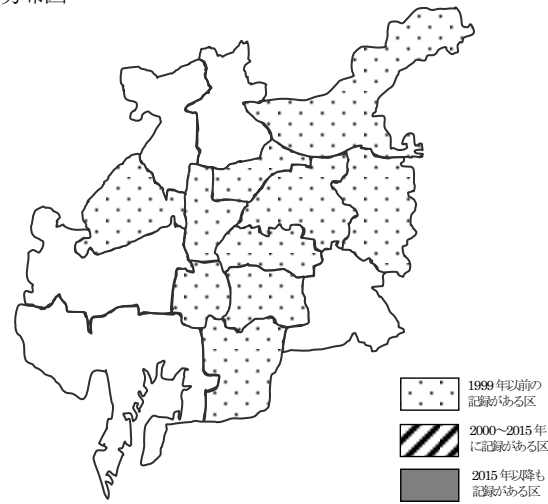
【関連文献】

安藤 尚・山本悠紀夫・高崎保郎・相田正人, 1990. 愛知県のトンボ目. 愛知県の昆虫 (上), pp.9-78. 愛知県.

安藤 尚, 2017. 愛知・岐阜両県のマイコアカネ (トンボ目) 衰退の記録. 佳香蝶, 69(269):1-9.

高崎保郎, 2017. 名古屋市猪高緑地の蜻蛉と蝶. なごやの生物多様性, 4:89-126.

市内分布図



(高崎保郎)

サメハダマルケシゲンゴロウ *Hydrovatus stridulus* Biström

評価区分

名古屋市2020	準絶滅危惧
愛知県2020	準絶滅危惧
環境省2019	リスト外

【評価理由】

ヨシの生える良好なため池等に生息するが、近年は水田が減りため池も護岸改修が進んでいる。また移入外来魚やアメリカザリガニなどの影響で、その他生息に適した水域が失われ、生息域が少なくなっている。

【形態】

体長2 mm 内外。体型は卵形で、上翅の先端部は少し尖る。背面の膨隆は強く、光沢は同所的に生息する可能性の高い近似種のコマルケシゲンゴロウやマルケシゲンゴロウよりも鈍い。同定には注意が必要である。



【分布の概要】

【市内の分布】

天白区。

【県内の分布】

日進市。

【国内の分布】

福井県、石川県、岡山県、埼玉県、奄美大島、沖縄島、石垣島、西表島、小浜島、与那国島に分布する。

【世界の分布】

台湾、マレーシア、シンガポール、ラオス。

【生息地の環境／生態的特性】

ため池など。アシの茂った深い場所を好む。生息する池でも、浅く水草の繁茂した場所には近似のコマルケシゲンゴロウが生息している。

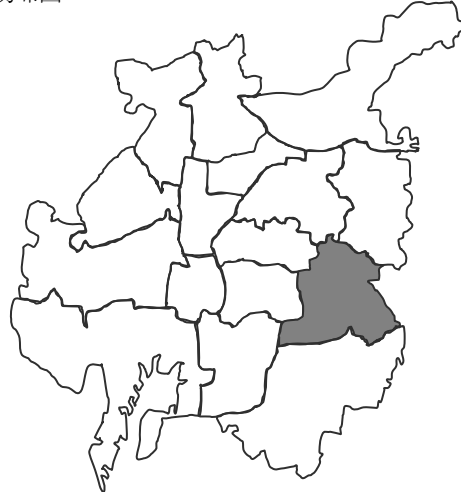
【現在の生息状況／減少の要因】

市内で生息が確認されている池は1カ所のみである。ため池の改修により、護岸や植物の除去が致命的になる。

【保全上の留意点】

市内のため池は、流入する水質の悪化や、移入種魚類駆除を積極的に行うとともに、浸透移行性殺虫剤の使用について規制するなどの生息を圧迫する要因を排除する必要がある。

市内分布図



【引用文献】

- 稲畑憲昭 2016. サメハダマルケシゲンゴロウの日本からの初記録. さやばね N.S. No.21 : 46-47.
 渡部晃平・富沢章・稲畑憲昭 2016. 本州におけるサメハダマルケシゲンゴロウの初記録. さやばね N. S. No. 23: 15-16.
 渡部晃平・保科英人 2016. 福井県におけるサメハダマルケシゲンゴロウの記録と生息地保全に向けた対応. さやばね N.S. No. 24 : 33-35.
 戸田尚希 2017. サメハダマルケシゲンゴウが愛知県にも分布. 佳香蝶 Vol.69 No.271: 47
 末長晴輝・渡部晃平・山地治 2017. 岡山県におけるサメハダマルケシゲンゴロウとオオマルケシゲンゴロウの初記録. さやばね N. S. No. 28: 51-52.
 亀澤洋・渡部晃平 2018. 埼玉県からのサメハダマルケシゲンゴロウの記録とマルケシゲンゴロウの記録未消. 寄せ蛾記 No.170: 39-40.

(戸田尚希)

ホソバセセリ *Isoteinon lamprospilus* C. et R. Felder

評価区分

名古屋市2020	準絶滅危惧
愛知県2020	準絶滅危惧
環境省2019	リスト外

【評価理由】

以前から多い種ではなかったが、市内に広く分布していて、守山区などで記録がある。、樹林の管理放などで激減しつつある。全国的にも減少している。

【形態】

開張 33mm 前後。雌雄の斑紋はほとんど同じ。雌の翅形はやや幅広い。雌の腹部は太い。裏面が特徴的で同定は容易。



ホソバセセリ

【分布の概要】

【市内の分布】

守山区竜泉寺 (1950)、守山区中志段味 (1977) 名東区牧野ヶ池緑地 (1978) など。

【県内の分布】

尾張平野部から三河山間部まで分布は広いが、個体数は多くない。

【国内の分布】

九州、四国、本州に分布するが、必ずしも普遍的ではない。

【世界の分布】

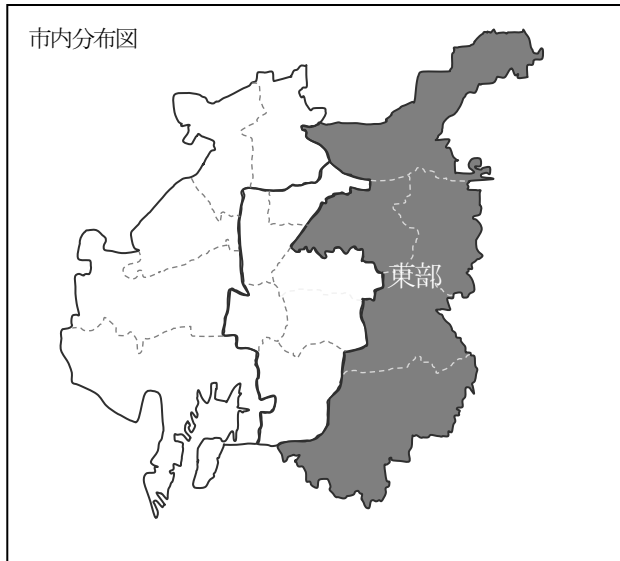
朝鮮半島、中国 (中・南・西部)、台湾、ベトナムに分布する。

【生息地の環境／生態的特性】

平地から低山地の森林に接した草地や疎林、林縁部。規模の大きい明るい草原には見られず、森林と接したやや日当たりの悪い草地やススキの生える荒れ地に見られる。年1回6~8月頃出現する。幼虫はススキ、カリヤス、オオアブラススキ等のイネ科を食草としている。

【現在の生息状況／減少の要因】

減少の要因は、市内での草地環境の減少・分断に伴う、生息条件の悪化である。都市近郊では里山の管理放棄によって減少している。



【保全上の留意点】

本種のような草原性の昆虫は、近年全国的に減少傾向が指摘されている。種の保全には、ススキ草原のような日本の旧来型の草地を、適地に大切に育成し維持することが必要である。

【引用文献】

野田正一, 1977 名古屋市守山区にみられる蝶. 佳香蝶 29 (111) : 31-33
 高橋 昭・葛谷 健, 1950 中部東海地方産蝶類目録. 佳香蝶 2 (4) : 1-20 高橋 昭・葛谷 健・阿江 茂ほか, 1991. 愛知県のチョウ類. 愛知県の昆虫 (下), pp.21-95. 愛知県.
 中野善敏, 1978 名古屋市の蝶 (第3報) 1977年の記録. 佳香蝶 30 (115) : 39-42.

【関連文献】

白水 隆, 2006. 日本産蝶類標準図鑑. 学習研究社, 東京.
 日本チョウ類保全協会, 2019 フィールドガイド 増補改訂版 日本のチョウ 343 東京

(江田信豊)

オオウラギンスジヒョウモン *Argyronome ruslana* (Motschulsky)

評価区分

名古屋市2020	準絶滅危惧
愛知県2020	準絶滅危惧
環境省2019	リスト外

【評価理由】

ウラギンスジヒョウモンと比べて森林性である。都市部で森林が減少しているため少なくなっている。平野部でも記録があるが個体数は少ない。

【形態】

開張 65mm 前後。色彩斑紋は雌雄で大差はない。雌は前縁の前翅端近くに三角形の白紋がある。雄にはウラギンスジヒョウモンにみられるような前翅の表面の後縁近くの黒色発香鱗条はない。

【分布の概要】

【市内の分布】

北区 (1937)、守山区竜泉寺 (1956)。

【県内の分布】

県内では産地が局限され、個体数も少ない種類である。

【国内の分布】

北海道、本州、四国、九州に分布する。

【世界の分布】

朝鮮半島、中国北東部、ロシア南東部に分布する。

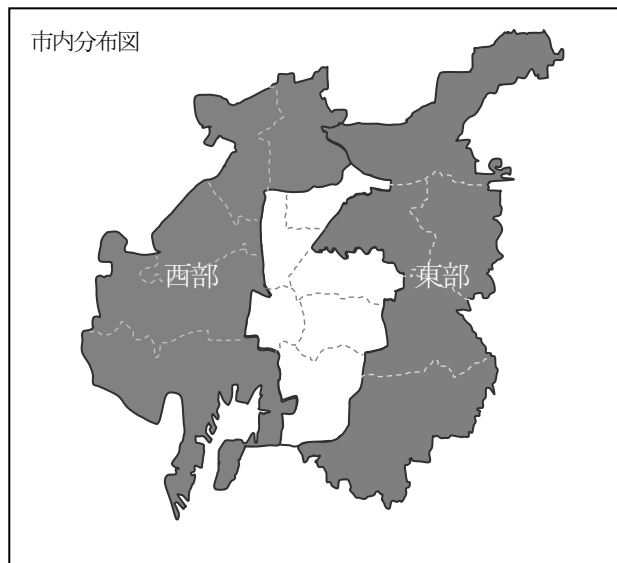


【生息地の環境／生態的特性】

年1化で6月から7月下旬に現れ、盛夏には夏眠のため一時姿を消し、秋に活動を再開しアザミ類、ヒョドリバナ等の花に吸蜜に訪れる。食草はスマレ、ツボスマレ、タチツボスマレ、フモトスマレ、エイザンスミレなど各種のスマレ類を食べる。あたえればビオラ、パンジーも食べる。雌は卵を食草に産み付けずに、近くの植物に乱雑に産み付ける。越冬態は卵。

【現在の生息状況／減少の要因】

近年、名古屋市内を始め周辺の尾張平野などの低地での観察例が少なくなり、以前比較的多くみられた三河の低山地から奥三河の山地でも個体数が減少している。秋には低地部に移動する個体も多く都市近郊でみかけることもある。都市化によって森林が減少することによって本種の生息場所も減少している。



【保全上の留意点】

今日、ヒョウモンチョウ類のチョウが全国的に減少傾向にあるが、本種の場合は森林性のために里山などの保全が必要だと考える。

【引用文献】

中野榮三、1937 名古屋市北郊の蝶類、昆虫研究 1 (2) : 40-44
高橋 昭・葛谷 健、1956 中部東海地方産蝶類目録 第3報 佳香蝶 3 (3/4) : 1-123

【関連文献】

白水 隆、2006. 日本産蝶類標準図鑑. 学習研究社, 東京.
日本チョウ類保全協会、2019 フィールドガイド 増補改訂版 日本のチョウ 343 東京

(江田信豊)